

『満天の星々』

飯豊山縦走

情報処理教育係長 小 菅 富士雄

私が高校2年生の夏休みのことであった。兄たち3人が飯豊山縦走を計画し、その登山に私を連れていってくれた。私は、正直に言って持久的運動が苦手で、登山などは特に苦手であった。そんな私を山好きの兄が誘ってくれたのだった。

その年の夏は、いわきの地でも猛暑となり、毎日晴天の日々が続く。登山には最適な年であった。そして、登山に必要な食料、テント等の荷が、いかに重く感じられたことを思い出す。

【全行程4泊5日；日記】

一日目、兄の仕事の都合により夕方出発し、米沢（米沢駅にて仮眠する）へ行く。

二日目、米坂線にて小国町まで行く。バスにて小国登山口へ、弁当を食べようとしたが、悪くなっていたためインスタントラーメンを食べる。予定時間を2時間ほどオーバーする。西俣ノ峰（1023m）を目指し登頂する。

三日目、飯豊山（2105m）を目指し緩やかな尾根道を登る。しかし、北股岳（2025m）をすぎた地点で、ギブアップし、キャンプする。

四日目、早朝に出発し、飯豊山を登り熱塩加納村へと下山した。会津若松に宿泊する。

五日目、いわきに帰る。

今も、ありありとあの日々のが思い出される。

西俣ノ峰への登山。急な斜面の登山道であった。登山中、何回となく休み、兄に励まされながら登るが、一向に進まなかった。そんな我々の横手を残雪を踏みしめながら直線的に登るパーティーを

見て、また頑張り、登り続けた。

“登頂”時間は5時を過ぎていた。テントを張り、コッフェルで煮炊きし夕食を作った。楽しいそして大変おいしい夕食であった。

夕日が西の山々に消えかけてゆく。真っ赤な太陽、肉眼で見てもまぶしさを感じない大きな太陽の前に、黒い雲がなびいていた。何とも言えない光景であった。

あたりが暗くなり、一段と寒さが増しテントに入るが、一向に暖かくならず震えていた。

寝袋に入る前にテントを出ると、外は非常に明るかった。月の明かりと、それをもしのぐ星々の輝きであった。太陽にも劣らぬ月の大きさと明るさ、ひとつひとつの星たちの電灯とも思える大きさと明るさ。今も脳裏に焼き付いて離れない「満天の星々」、すばらしい思い出である。

人はよく「登山は病みつきになる」と言うが、事実、高山植物の小さな可憐な花々を見て、また、高い山頂でしか見ることのできないすばらしい夕日、光輝く数多くの星々を見ると、また来たくなる。そんな気持ちが理解できた。でも残念なことに私は、後にも先にも高い山を3日もかけて縦走したのは、このとき1回限りであった。

人それぞれに思い出は多くある。私は飯豊山の登山を通して、登る苦しみと切り切った楽しさ、すがすがしさを深い思いで体験した。

このことで、以後、何でもやり遂げる精神を養い得たような気がする。